ってもらった」「家にはコンピューターがある」という５つの項目に対する回答から合成変数をつくった。「上位」「中位」「下位」の３分位。(01 年調査のみ)

(b) 学校効果

欧米の「学校効果」(school effectiveness) 研究における概念で、「人種や階層等の家庭背景要因による学力格差をのりこえる、学校が生み出す力」を意味する。学校効果は、論者によってさまざまに概念化されているが、ここでは、アメリカのエドモンズの枠組みにそって分析を行なう。くわしくは５節を参照のこと。

３．社会集団別にみた学力とその変化

上に述べた社会集団のカテゴリー別に、子どもたちの学力テストの平均値と標準偏差を算出してみた結果が、表４－１である（表中の「格差」とは、点数の高い方のカテゴリーから低い方の点数を引いた数値である)。この一覧表から、次のような事実を指摘をすることができる。

表4－1　社会集団別の得点

			小学校				中学校			
			算数		国語		数学		国語	
調査年	階層変数名		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
89年	＜地区＞	地区外	81.2	17.2	77.2	16	70.8	21.2	72.3	18.1
		地区	77.1	19.5	72.6	16.6	61.7	21.9	65.6	19.2
		格差	4.1		4.6		9.1		6.7	
	＜通塾＞	通塾	84.3	15.6	79.6	15.3	75.8	18.6	74.5	16.2
		非通塾	79	18.3	75.1	16.6	62.5	22.5	68.4	20.2
		格差	5.3		4.5		13.3		6.1	
01年	＜地区＞	地区外	70.6	19.4	73	16.2	65.6	25.4	68.1	18.9
		地区	58	27.6	61.2	24.7	54	26.9	60.5	22.6
		格差	12.6		11.8		11.6		7.6	
	＜通塾＞	通塾	73	19.4	75.9	16.2	74.5	20.8	71.9	10.5
		非通塾	67.5	21.2	69.6	18.6	54.5	25.4	63.2	20.3
		格差	5.5		6.3		20		8.7	
	＜父学歴＞	大卒	72.4	20.3	74.3	17.8	72	23	72	17.8
		非大卒	65.8	21.7	68.2	19.1	59.2	25.8	63.9	19.7
		格差	6.6		6.1		12.8		8.1	
	＜文化階層＞	上位	70.6	19.3	74.2	17.2	70.5	24.6	71.5	19.2
		中位	71.5	19.4	72.7	17.5	66.1	23.2	69	16.6
		下位	65.1	23.2	67.1	19	56.2	26.1	61.9	20
		格差	5.5		7.1		14.3		9.6	

① まず、「地区」については、格差が拡大する傾向に。特に、小で顕著。

「地区」の子どもたちと「地区外」の子どもたちとの平均点の格差は、「小算」では 4.1 点→12.6 点に、以下、「小国」4.6 点→11.8 点、「中数」9.1 点→11.6 点、「中国」6.7 点→7.6 点と、軒並みアップしている。特に、小学生の落ち込みがひどく、２つの教科ともで 10 点以上の格差が生じている。

②「通塾」についても、拡大傾向。

通塾についても、それほど大きな落ち込みではないものの、やはり格差は大きくなる傾向にある。とりわけ、中数については、塾に通っている者といない者との平均点の格差は、ちょうど 20 点に達している。

③「父学歴」「文化階層」についても格差が存在。

01 年独自の階層指標である「父学歴」「文化階層」についても、「通塾」とほぼ同水準の格差が存在している。４つの教科を比較してみるならば、「通塾」の場合と同様に、「中数」について格差が顕著である。

④小より中で格差が拡大する傾向あり。

小と中の同教科の数字を比較すると、いくつかの例外を除いて、やはり中学校で格差が拡大する傾向にあることがわかる。一方、算・数と国では、小学校では差が見られないが、中学校で数学の格差が大きくなっている。

⑤「下位」カテゴリーの標準偏差が大きくなる傾向あり。

次に、点数のばらつき（標準偏差）をみてみると、いずれの集団カテゴリーにおいても、平均点が下位のカテゴリーの標準偏差の方が、上位のそれより大きくなる傾向が認められる。すなわち、よりできないグループの方が、大きな点数のばらつきをもつのである。

⑥「地区」「通塾」について、標準偏差が拡大する傾向。

89 年と 01 年との比較が可能な２つのカテゴリーについてみると、いずれの教科においても、標準偏差の値が一様に高くなっていることがわかる。すなわち、子どもたちの間の点数のばらつきが、一様に大きくなっているのである。ことばを換えるなら、できる子とできない子との格差が拡大しているということである。

以上をひっくるめると、次のように言うことができよう。すなわち、４つの指標で図られる集団間でのパフォーマンスには、一貫して明らかな「格差」があり、さらにその格差は、この 12 年間で着実に拡大する傾向にある。

全体として、学力の階層間格差は拡大しつつある、と結論づけることができる。